

土筆

池松 孝子

正岡子規の最初の歌碑が、子規邸跡に建立されたのは昭和二十六年。二才から十七歳で上京するまで住んでいた中の川緑地帯の家跡にある碑には「くれなゐの梅散るなへに故郷につくしつみにし春し思ほゆ」とある。「紅梅の下に土筆など植ゑたる盆栽一つ、左千夫の贈り来しをながめて朝な夕なに作りし歌の中に」の詞書があった。明治三十五年、根岸短歌会の門人の伊藤佐千夫が盆栽をもって見舞いに訪れた時のこと。子規が土筆を好きだったことはよく知られていて「土筆ほど食つてうまきはなく、つくしとりほどして面白きはなし」と言っている。

土筆は三億年も前から生き続ける不思議な植物。栄養茎の杉菜と孢子茎の土筆は横に走っている地下茎で繋がっている。地上に出るとき、孢子茎と栄養茎に分かれる。杉菜は羊歯類だから花は咲かない。その代わり、土筆が繁殖のため孢子を放出する。

土筆と杉菜というと、すぐに路の臺と路を思い起こす。これらは一見、全く別の植物のようだが、地下茎でつながっていると知った時の子供の頃の強烈な印象が今でも忘れられない。そう、童謡「つくし誰の子、杉菜の子」だ。植物とは違うが「おたまじゃくしは力エルの子」を知ったのと同じ思いを持つのだ。

幼い頃夢中になった遊びがある。それは「接ぎ松」と言うそうだが、そんなことは知らないで遊んでいた。土筆でも杉菜でもやったように思う。土筆を一本抜いてその節（はかま）のどこかで抜く。そして友達に気づかれないうつなぐ。曲がっていないまっすぐな土筆を選ぶのは初心者。そして「どこをつないだでしょうか」と当てっこをするのだ。それがなかなか分からない。なんとたわいのない遊びだったことが。

土筆は生長が早い。二、三日で杉菜が追いかけて顔を出す。若い土筆の節をとって早春の味覚を味わうのだ。和え物、つくだ煮などどれも何とも言えないほろ苦さがある。それぞれの好みにもよるだろうが。